

# 山形大学附属博物館報 10

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1984. 1. 20

## 目次

- 博物館の効用 ..... (1)
- アメリカの博物館 ..... (2)
- 農業と土 ..... (3)
- 博物館資料収集雑感——旧制山形高等学校関係資料によせて—— ..... (4)
- 昭和58年度 特別展・公開講座を終えて ..... (5)

## 博物館の効用

竹村 欣也

博物館は何の役に立つか。専門家からは、いろいろむづかしいことが語られよう。私が述べるのは、画家というわけでもなく、歴史学者というわけでもない、一般の外国旅行者にとっての博物館の効用である。1982年の秋の見聞をもとにして拙文を綴る。

外国に行って博物館を訪れることの第1の効用は、スーヴェニア品に対する関心が失われることである。

日本人は国内を旅行するときと同様に、外国でも、家族に何かとか、お別れを頂いたからとか、前にお土産をもらったからとかいうわけで、お土産品屋で、限られている時間とお金の少からざる部分消費してしまい、荷物が積んで行動の自由が利かなくなり、挙句の果ては折角の品物を紛失したり、かっぱらわれたりの憂き目に逢ったりして、外国旅行をしてきたものやらさだかでないような人も多い。

このような人は、たとえばオランダに行くと、デルフトのタイルとかビューター製の食器とかダイヤの指輪を仕入れたりする。

しかし土産品屋で費すであろう時間を割いて、まず先にアムステルダムの国立博物館に立寄ってみよう。そこでは壁一面に貼りつめたタイルが豪華な壁面を構えている食堂が展示されているのを見る。また、とつともなく大きく、どの部分も精巧を極めている宝飾品、金、銀、ビューターの器を見る。そして次に土産品屋をのぞけば、デルフト焼と称して売られている濃紺の馬車の模様タイルは、どこか黄金の安い国で作って持って来たものではなからうかと見当がつくようになる。ダイヤや食器につ

いても、同様の鑑賞眼が養われるであろう。

そして、お土産とは土産品ではなく土産話たるべきであり、土産品を仕入れるよりは、土産話の種子を仕入れる方がましであることを悟るであろう。

余談ながら、絵の実物の大きさが分かるのもよい。レンブラントの油絵「夜警」があればほど大きく、またエッチング（銅版画）があればほど小さいものと知らなかった。「夜警」は国立博物館の二階まで通っているような大広間の壁一つを占拠していた。彼のエッチングのほとんどを展示しているのは、Jodenbreestraat（英語に直訳するとJewish Broad Street）にあるレンブラント館であり、彼がユダヤ人の妻を娶って最盛期を過ぎた（1658年まで）家である。ここではエッチング制作の技法を工程別に展示していた。ビカビカの銅板にロウを塗り、細い針で絵を書いてロウをこすり取る。出来上りの絵は左右逆になるから、Rembrandtという著名も、右から左に、鏡に写っている字のように書いておかないといけない。その銅板を強酸のなかに浸し、ロウの取れた部分を高酸させて版を作る。彼は用紙としては和紙を好んだ。この博物館に展示してあるエッチングで最も印象に残っているものは何かと問われれば、それはトイレの標識であった。通常、ハットやスカートの印がついている位置に掲げられているのは、なんと、農夫と農婦の盛大なる放尿の図であった。もちろんレンブラントの真筆である。わが記憶力の傷りは誠に遺憾に堪えない。

レンブラント館は、アムステルダム大学経済学部の斜め前にあり、ここで1982年の秋6週間世話になっていた。昼休みにそのレンブラント館に行ってきたと話すところ、先生方が二人、われわれはまだ行ったことがないとのことであった。近頃の良いものに疎遠なのは万国共通のようである。

アムステルダムからロンドンに行った。ここでは1週間足らずの短い滞在ではあったが、かの大英博物館の他、

いくつかの博物館を巡った。そしてここで、一般の外国旅行者にとって博物館が持つ第2の効用を発見した。それはすなわち昼食の便宜にありつくことである。

外国を旅行していると、どこで何を食べればよいものやら途方に暮れることが多い。レストランに坐ると高いし遅い。立ち食いもわびしい。日本式が可憐。そば屋の類はないものかと痛切に感じる。しかし、大英博物館なり、オショナル・ギャラリーなり、利用者の多い博物館に行ってみよう。入館は無料である。都合次第で食堂に直行してもかまわない。すると世界中から集まって来た上品な人たちが、おとなしく列を作り、沢山の並べてあるメニューから好きなものを選んで自分で空皿まで運び、もの静かに食事をするのにまぎればよいのである。

退館するときには、「本館の収蔵品を充実させるための芳志を募ります」といった掲示と募金箱が目に入ることがある。その時はなにがしかの金を快く納める気になったものである。

(人文学部 教授)

## アメリカの博物館

斎藤 常正

10月のはじめの2週間、アメリカの東部と西部を駆け足でまわってきた。このあわただしい旅の目的は、博物館をめぐって収蔵されている標本を検討することにあつたが、その際にはからずも、国立、市立、大学付属という、規模や設立目的が違った3種の博物館をつぶさに比較する機会をもった。

### 国立博物館

ホワイトハウスの真南1キロの所に、米国初代の大統領を記念して建てられた、ワシントン・モニュメントというオベリスク型の塔がそびえ立つ。この169メートルの高い石造りの実塔のふもとから東を見ると、長さ1.7キロに亘つて約500メートルの大芝生が広がり、かなたに白亜の米国議会講堂が望まれる。モールと呼ばれるこの広大な緑地帯の両側に、アメリカの国立博物館の多くが並んでいる。ワシントン市の人々は、それらをスミソニアン愛称で呼んで親しんでいる。正式には、さらに1語が加わってスミソニアン・インスティテュードであるが、それは12種類の美術館・博物館とワシントン動物園をひっくるめた名称なのである。

この中でもっとも人気があるのは航空宇宙博物館で、気球、飛行機、宇宙船など、人類の空を飛翔願いのサベ

てを一つ屋根の下におさめている。そこには、はじめて空を残したライト兄弟の布張り機から、リンドバーグが大西洋の無着陸横断に成功したスピリット・オブ・セントルイス号、音速の壁を世界ではじめて破ったジェット機、月着陸のアポロ号などの数々が大ホールに飾られ人々の目を奪うのである。航空宇宙博物館の真向いには、国立美術館がある。ここには、モナリザの名画と比肩される、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたジネグラ・ド・ベンチの肖像画があり、ヨーロッパの外にあるたった一つのダ・ヴィンチの絵である。

美術館と並んで、円形のドーム屋根をもつ、石造りの広大な建物がそびえる。これが自然科学関係の展示を納めた自然史博物館で、四層に分かれた内部には、恐竜で代表されるさまざまな化石から、現世の動・植物、隕石をはじめ鉱物や宝石、アメリカインディアンをはじめ世界各地の考古・民俗などが系統順に、しかも目を楽ませさせてくれるように並んでいる。有名なコレクションの一つは、44.5カラットの大きさがある、きれいな青色のダイヤモンドでホープダイヤと呼ばれる。この旅の目的の一つがこの博物館であつたので、展示以外の博物館の舞台裏と言えそうな場面をつぶさに見る事ができた。



国立自然史博物館(ワシントン市)

米国の国立博物館は、研究と収集・保存に大きな力が注がれて、展示はその一部という印象を受けた。博物館の研究陣には、各専門分野で博士号を得た一人立ちの研究者が、教授、助教授等に相当する。正・副・補助のキュレーター制度をとって勤務し、研究から大学院生の指導も行っている。

### 大学付属博物館

カリフォルニア大学のバーkeley校は、米国西部の名門校で銘が、ここには、レストランや書店を備えた本格的な美術館、科学館、古生物学博物館、植物園という付属施設をもっている。この中の古生物学博物館は、山

那大学の博物館などに比較できるもので、標本の整理・保管を主な目的としているようだった。この博物館は、地球科学科に付属し、建物の地下1階がそれに当てられている。階段を降りた小ホールに、恐竜が岩盤に埋もれたままの姿で展示されているが、顔の大部分には、分類別に化石を納めたスチール・キャビネットが並んでいた。

## 市立博物館

今年オリンピックが開催されるロスアンゼルス市には、有名なUSC（南カリフォルニア大学）の校舎に隣接して、野球場や博物館などの施設が並んでいる。市立博物館は、この地方に住んでいたプエブロ・インディアン人の酋長の上の家を模して建てられ、カリフォルニアの輝く太陽と良くマッチしている。展示はスミソニアンのに似たと云った所であるが、カリフォルニアの自然を特にとり上げている。ロスアンゼルスまわりの油田で見つかった、タールの象に落ち込んで保存された、剣歯虎や大ナマケモノ、帝王マンモスなどの大型の骨格は、四万年前の水河時代を彷彿とさせてくれる。



肉食恐竜ティラノサウルスの頭骨  
(ロスアンゼルス市立自然史博物館)

日本に先立つ、50~100年ほど前にスタートしたアメリカの博物館は、設置されたそれぞれの目的に応じて、博物館活動が良く機能しているという印象を強くした。森園とした日本の多くの博物館とくらべると、アメリカの博物館は、子供から大人まで人々にあふれ、食堂、書店、売店がもうけられて、博物館を楽しむことができる。工夫された展示の仕方、注意をそらさない背景の絵や色彩など、まだまだ多くの点でアメリカの博物館に学ぶことがありそうである。

(理学部 教授)

## 農業と土

東山 勇

昭和37年に我が国の人口1人当りの米の消費量はピークに達し、翌38年より米の消費は一途減少をたどることになる。42年の大豊作を契機として米の過剰問題が表面化し、以来、減反、水田の畑作転換対策が打ち出されるが、米の過剰基調は是正されず、52年で古米持越量は、367万トンに達し、水田利用再編対策がはじまる。今年で既に第2期を終了し、来年からは第3期にはいるが、一方では、米以外の食糧は殆ど外国に依存する世界最大の食糧輸入国としての現実が続いている。

国民の米びねの理由を、昭和29年に制定された学校給食法に求める人もおれば、これらの経緯が、我が国の経済の高度成長と期を一にすることを指摘する人もいる。また、そんな単純な問題ではなく、米囤依存型の農業を戦後30年ひたすらに培った背景を論じる人もいる。事実、小麦200万トン以上、大豆400万トン、さらに飼料穀物に至っては1,600万トンを輸入するといった米囤第一の得意先であることを考えると、あなたが否定することもできない。しかしここで私が取りたく不安に思うのは、こうした変化が、単に農業の問題にとどまらず、何時のまにか我々の物の考え方、自然に対する態度を著しく変ぼうさせてきた事実である。或は逆に変ぼうしてきたからこそ、農業も変わったという人もいるが、それはともかく、工業はもちろんのこと、農業といえども国際的な場で考えなければ、とて一國の事情だけでは、やっていけないという厳しい現実が、このような変化をもたらしてきたことも事実である。

ゼトロイトのHenry Ford Museumを訪れた時、開拓時代から今日まで色々な生活用品、農機具、自動車の開発など、ありとあらゆるものが展示されており、その規模の大きさ、内容の豊かさに驚かされた。今世紀の前半を特徴づけるフォード・システムの成立過程をかいま見る思いがしたが、同時代はエジソンの時代であり、さらにもう一つ意外なことを聞かされた。日本の教科書ではあまり教わらなかったが、ケチヤップの発明、それによるアメリカ人の食生活の変化、そしてこれを大量生産のベースにのせる、今でいう食品工業のはしりの技術革新があったことである。そして今日のアメリカ型農業は、この時から始まり、農機具やトラクターがどんどん改作され改良されていったことを聞かされた。

ミシガンのジャクソンにFarm Museumがある。ここには1800年代中頃から後半にかけての、農機具や生活必需品とともに、農家の生活を現実的に展示している。当時の服装をしたアルバイト嬢が糸をつむいだり、ハタを

織ったり、台所にはいると、当時の保存食物がころがっていたりする。アメリカ人は建国の原点である農業や開拓時代の農村の人達の生活を、たえず忘れないように努力し、アメリカ精神のよりどころとしており、農業を大切にしていることがよくわかる。アメリカの歴史は浅い。それ故に歴史への強い願望が秘められているのかもしれない。

我が国は、戦後30年にして、これまで1000年もかけて育ててきた水田農業を簡単に、忘れ去ろうとしているかに見える。土の中には大小さまざまな微生物や小動物がせまい空間を巧みに棲みわけ、複雑な生態系を形成している。水田は水をほるることによって、稲の苗にとって有利な環境を確保できるし、畑のように連作障害もない大変巧みな生産手段である。農業とは土地を基盤に生物による生産を行なうが、生態系を維持する為には農地に再び必要なものを還元するリサイクル型の生産を本質としたもので、それだからこそ、同じ場所でも1000年も生産をくり返すことが可能であったと考えられる。その点、資源を使い果たせば生産も止ってしまい、使い捨て型の工業とは本質的に異なるものである。都市の周辺では石油消費型のハウスがふえ、最近ではカンなどの果物までハウスの時代になった。さらにはまた、農業の工業化という言葉を耳にすることが多いが、農業と工業は本質的にちがう点を忘れかけた時、我々の生活や考え方は、環境とともに変ぼうしていくのかもしれない。

レキ栽培のような土を使わない水耕農業が注目されつつあるが、これらは工業化には役立つかもしれないが、そのような単純な生態系で作られたものは、病気がかかり易く、それをおさえるために、常に化学物質が投入される。このような化学肥料づけ、薬づけの野菜や食品が、何時のまにか、我々の身近に集まりつつある。都市の周辺で多量発生するアメリカシロヒトリは、生態系のバランスがとれている森林などでは、絶対異常な発生はしない。農業は土壌、気候、雨量など色々な環境要素を基礎になりたつものである。年降雨量が400ミリあれば、何とか小麦は作れるが、水田を作るには少くとも800ミリ以上は必要とされている。水田に生える植物の根は、少くとも10m以上は地中深くはいらなければ生きていられない。雨の多い我が国の畑では、せいぜい数10cmである。しかし外国の人と話をするときには、畑では少くとも1~2mの根群域を考えねば話しかみあわない。我が国の農地で火山灰土壌の占める割合は大きい。東北地方だけに限っても黒ボク(有機質火山灰土)は26.3万haで全耕地の27.6%を占めている。外国人にしてみれば、ニュージーランドなど一部を除いては大変特殊な土ということになるが、日本人にとってはごくありふれた土である。アメリカなどと違って、狭い国土で、雨が多くまた火山灰土壌

の多い我が国で成りたちうる選択の道は、決してそう多くはないと思われるが、現実には経済的思考が優先するので、時、ところをかまわずに色々な道が選ばれている。しかし、いずれその高い代償を我々は払わされる時が、早晚やってくるのではないかと思われてならない。

大学の附属博物館で「土と生活」の公開講座や展示が企画されたことは喜びにたえない。日頃、土を通して、我が国の戦後の烈しい変ぼうを眺め、農業の在り方に疑問をもってきた身には、まさに時宜を得た企画と考えられた。そしてさらに付け加えるならば、我々が、どのような時代を、どのように生きて行こうとしているか、方向を見失いかけたとき、大きな力を与えてくれるものが博物館であることを、ささやかな私の体験から強調しておきたい。(農学部 教授)

## 博物館資料収集雑感

——旧制山形高等学校関係資料によせて——

中澤 勝彦

博物館の仕事は、多岐に亘り複雑であるが、基本になる仕事は、資料の収集、保管・調査・研究、展示と教育活動の五つである。このうちの仕事が大切かということではなく、この五つの機能が表裏一体、渾然と関連し合って博物館となるのであって、この五つの要素がばらばらであってはならない。但し、重要度の順位を言えば、資料の収集が優先する。しかも、博物館で資料を収集する場合は、資料価値の高い「実物そのもの」を収集することが第一である。

博物館資料を、形質によって分類すると、直接資料として、実物そのものと標本、間接資料として、模型、複製(レプリカ)写真(スライド)映倫(テレビビデオ)音声(録音)レコード、図表、文献などであるが、この中で価値の高い資料は、「実物そのもの」である。博物館は即物教育の場であるから、「ものそのもの」(実物—ほんもの)が豊富に収集され、展示されることが大前提である。然るに、最近博物館で実物資料を収集することが、困難になってきているため、新設の博物館等に於いては、莫大な経費を使って、複製や模型資料で展示を構成している館が多い。その結果、博物館は博物館本来の目的である、実物による研究・教育という機能から遠ざかり、「見るもの」という知識化、観光化した施設の色彩が強くなる傾向にある。

ところで、当博物館が、旧制山形高等学校関係資料を収集しようとするところ、当時の資料が多く散逸・消失していて、その収集に困難を感じた経験がある。旧制山形高等学校が、昭和24年学校教育法によって、新制

大学となり、初めは山形大学文学部として発足したが、42年人文部、理学部、教養部と改組になり、現在に至っている。これに伴ない小川川キャンパスでは、新校舎建設が本格的にスタートし、旧施設は取りこわれ、山高時代の関係資料は一部を除いて、消失・散逸してしまった。旧校舎解体で惜しまれたのは、山高創立当時の文部大臣中橋徳五郎氏が採用したため、中橋式校舎の名が残った、副例に小部屋のある独特な正面玄関付きの校舎と、講堂である、「ふすま同窓会」では、保存運動にとりくんだが、キャンパス内の敷地問題や維持管理の面から、やむなく解体されてしまった。これと共に旧制山高時代の生活と物語る数々の「もの」が同時に失われた。一旦消失したこれらの資料を収集しようとしても中々集められない。

博物館は、実物から実物の中に潜在する価値を発見するという文化創造を促す機関であると同時に、その創造された文化財を、維持し、保管し、後世に伝え、普及させる使命を持つ機関である。子孫は、傳承された文化から、更に新しい価値を発見し、創造し、生活をより豊かに発展させていくというのが、文明をつくっていく人間の精神的段階である。文化は、残そうとする「意志」がなければ残らないものである。われわれ博物館関係者は、文化財保存について、一般の理解と協力が得られるよう、啓蒙に努力すべきであることを確感している。

(附属博物館学套具)

昭和58年度  
特別展・公開講座を終えて

特別展 「土と生活」

当館での今年度の特別展テーマは、「土と生活」で、下記  
の計画で実施し、来館者の好評を得た。



一、期 間 昭和58年10月22日(土)～11月2日(雨)

二、展示目的 土は、人間の生命を支えるものとして、原始の時代から、太陽・水・火と共に最も大切な存在で、「母なる大地」などと礼讃されながら、その重要性については、一般にあまり注目されない嫌いがあった。然るに最近、地すべり・山崩れなどの自然災害、カドミウム・化学肥料などによる公害問題、建設土木工事等による環境破壊に対する自然保護の立場から、「土」に対する関心が高まりつつある現状にかんがみ、「土」が現代のわれわれの生活と、どんなかかわり合いがあるかを理解できる資料を展示して、一般に公開する。

三、主な展示資料

- ①テーマ ——土のできるまで——
  - ア、土の生成を示すパネル
  - イ、土の母岩をなす岩石の標本
- ②テーマ ——農林業と土——
  - ア、火山系土壌(北海道有珠山の火山灰、関東ローム赤土、鹿沼土、月山ローム、褐色森林土他)
  - イ、沖積系土壌(北海道泥炭、津軽泥炭、宮城泥炭、八郎潟ヘドロ、尾花沢泥炭等)
  - ウ、ヘドロの溶けた水をE.B.剤で澄んだ水にする実験装置
  - エ、砂漠の土(イランの土、敦煌の土、中国の土一黄土)
  - オ、砂漠と人間生活(イラン国民の民族資料—土の家・煉瓦の家の写真、衣類・装身具・履物・測定品の実物)
  - カ、特殊な土壌(ラテライト、沖縄の土—さんご礁の土、珪藻土)
  - キ、林野土壌層の断面
- ③テーマ ——暮らしの中の粘土——
  - ア、粘土と生活の関係を示すパネル
  - イ、酸性白土(オリアン粘土) 酸性白土(モンセラロナイト) ゼオライト(板谷粘土) 及び解説パンフレット
- ④テーマ ——地盤災害と人間生活——
  - ア、地すべり・山崩れの起こり易い地形のパネル
  - イ、地すべり・山崩れの実況写真(山形県大蔵村、新田町急道)
- ⑤テーマ ——土の美と土の思想——
  - ア、土と炎の芸術(土器・土偶・はにわ・古代瓦・陶磁器・土人形)
  - イ、西アジア古代の粘土印章
  - ウ、粘土の彫刻(聖像—仏像)
  - エ、瓦と城壁の美(姫路城の写実画)
  - オ、日本人は土の中をこのように観念した。(地獄の

思想——地獄草子、日本神話に出てくる土の神)

◎テーマ ——江戸期における字者の、土に関する文  
献——

- ア、神宮司庁 古事類苑——金石部——  
イ、佐藤信芸 土性辨  
ウ、\* 玄明 培義秘録  
エ、滝本誠一 佐藤信芸家学全集

#### 四、見学者数 632人

##### ■ 資料提供者

- 人文学部 川副教授  
農学部 北村教授・東山教授  
教養部 山野井助教授  
山形県立林業試験場  
山形工事事務所  
ジークライト化学工業板谷営業所

#### 公開講座「土と生活」

なお、以上の特別展に関連して同じテーマで、当大学の教官を講師とし、「土」がわれわれの日常生活に、どんなにかかわり合いがあり、どんなに大切なものであるかの知識を提供する講座を、一般市民を対象に開催した。

##### 一、期間及び時間

昭和58年9月3日、10日、17日、10月1日、15日の  
各土曜日、午後1時30分から5時30分まで、計5回。

##### 二、募券人員 70名

##### 三、講義科目及び講師

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
第1回 9月3日	開講式	30分	
	日本の土壌	120	農学部教授 本岡 隆造
第2回 9月10日	生活の場と土	120	農学部教授 東山 勇
	山形県の地形 その成り立ち	240	教育学部助教授 阿子 島 功
第3回 9月17日	縄文土器のはなし	120	山形南高教諭 加藤 徳
	土と森林	120	農学部助教授 大谷 博 弥
第4回 10月1日	地すべり・山崩れ と人間生活	240	教養部助教授 山野井 徹
第5回 10月15日	土の神・山の神	240	人文学部教授 川副 武 風
	閉講式	30	

なお、今年度の学芸員資格取得のための博物館実務実  
習履修者数は下記のとおりである。

学 部	履修者数	合 計
人文学部	28人	43
教育学部	0	
理学部	15	

#### 昭和57年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	489 (人)
	団 体	78
大 学 生	個 人	405
	団 体	232
児 童 生 徒	個 人	43
	団 体	41
合 計	個 人	937
	団 体	351
	総 数	1,288

山形大学附属博物館 No.10  
1984.1.30 発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12